

ゾロアスター誕生神話の秘密：三位一体論の原型

大多和 明彦

(平成13年10月4日受理)

Das Geheimnis des Mythos von der Geburt Zarathustras : Das Urbild von der Trinität

Akihiko OHTAWA

(Received on October 4, 2001)

キーワード：ゾロアスター、三位一体

Key words : Zarathustras, Trinität

1 ビタゴラス、ソクラテス、プラトンの系譜

ソクラテス (bc 470~399) はアテナイの陽光の中を歩きながら、しばしば若者達に「善とはそもそも何か。」と問いかけた。しかしその問いかけの意味はほとんど理解されることはなかった。多くの場合彼らは、善の具体例を挙げることでこの問いに答えられると、考えてしまうのだった。「善とはなにか、それは、男にとっては戦場に出て勇敢に戦うことです。女にとっては家庭を守ることです。」

ソクラテスは心中苦々しく思う。「いやはや、まだまだ。この青年も、私が実は神とはなにかを問い、それへと導こうとしていることが、全くわかっていない。」そこで彼は改めて問い直す。「では君、『三角形とは何か』と問われて、君は『あの屋根が三角形です、この定規が三角形です。』と答えるかね。」「いいえ。三角形とは内角の和が180度である図形です。」「その通り。君は目に見える三角形の具体例を挙げるのではなく、三角形の本質を見事に言い当てた。そのように私は善の具体例ではなく、善の本質を訊ねているのだよ。それが神に通じる道なのだよ。」

善の本質、それは諸々の善を善たらしめるもの。そうは言われても、若者は混乱に陥るばかりだ。そして、せいぜいのところ自分が善の本質について、つまりは実は神についていまだまったく無知であることを知るばかりだ。(もっともこの「無知の知」こそ^{ソフィア・フレイシ}智を愛することへ

の、つまり^{フィロソフィア}哲学への第一歩だったのだが。)

世の大人達はいつものことだが、若者を混乱させるソクラテスを放っておかなかった。彼はいわば社会秩序転覆企図の罪で告訴され、結果、死刑を宣告される。(この過程は後にイエスもたどることになる。)多くの弟子達は脱出を勧めたが、彼は「悪法もまた法なり。」としてその申し出を避けた。そしてソクラテスは最後の言葉を懇願する弟子達に、「汝自身を知れ。」という有名な科白を言い残してから、悠揚として毒杯を仰いだと伝えらる。

「善とは何であるか。」「悪法もまた法である。」そして「汝自身(本来の自己の面目)を知れ。」ソクラテスが残したこれらの言葉は、彼の臨終の場に居合わせた多くの弟子たちにさえ、ほとんど理解されなかつただろう。「悪法という現実的な悪もまた、それ自体非顕現の絶対的善が顕現するためには欠くべからざるものだ。そして、絶対的善は現実的相対的善悪の彼岸にあるのだ。さらにそのような絶対的善こそが神であり、我々の魂(本来の自己)はその神の下に帰還するのだ。」このように彼は言っているのだ。しかし彼の本意はまことに理解するに難しかった。

「善とはそもそも何か。」「善と私」とは、いかに関係するのか。この関係をよく見抜いていたのがプラトン (bc 427~347) だったと、私は思う。彼は20歳でソクラテスの門を叩いて以来8年間にわたって、「善と私」との関係、言い換えれば「神と私」との関係について、教えを受けてきたにちがいない。そして彼が後に述べることになる有名な『洞窟の比喩』は、ソクラテスが提示し

た「善と私」との関係、「善」へと至る魂の上昇^{アセンション}の過程として、とらえ返したものだのだ。

プラトンはソクラテスの死を見届けたのち、約10年にわたる遍歴の旅に出た。キュレネ、エジプト、南イタリア、そしてシシリア。この旅の途上でプラトンは、ピタゴラス (bc570～496) の考え方に初めて出会った、と多くの書は伝えている。しかし私には、ソクラテスが彼よりおよそ100年前に生きたピタゴラスとその後継者達についてよく知っており、これをすでにプラトンに教えていたように思われる。

というもソクラテスが常に若者達に用いた「問答法」^{ディアローグ}は、畢竟、本来の自己への魂の昇華^{アセンション}を目的としており、これはピタゴラス学派の人々が肉食を断った清浄な生活の中で修行しながら、真剣に求めていたものだったからだ。

さらにまたソクラテスによれば、魂はかって神々とともに永遠不変の世界（これをプラトンは「イデア界」呼んだ。）にあったのだが、それが肉体の内に落ちることによって、以前見ていたイデア界をすっかり忘れてしまったのだと、言われる。そこで今や肉体とともにある我々の魂は、この前世の忘却を「想起」し、かって神々とともにあった自己本来の場所へと戻ろうとするのだ。想起つまり remember とは、かって神々のメンバーであったことをもう一度 (re) 思い起こす (member) ことなのだ。ソクラテスが盛んに用いていた「産婆術」^{マイトサイケ}とは、若者達の魂が本来の場所へと帰還するのを助けようとしたものに他ならない。（仏教流に言えば、「自己本来の面目」を「始覚」すること助けようとしていたのだ。）

ソクラテスの「想起」という考え方は、かって神々とともにあったとされる魂が現在の魂と連続しているという考え方を前提にしなければ成り立たない。つまりソクラテスは魂の不死を前提にしている。そしてこの思想こそ実は、ピタゴラスが強調していたことだった。

伝説によると、ピタゴラスはある日路上で犬がぶたれているのを見て、「止せ、それは私の友人だ。声でそれだと分かった。」と言ったそうだ（『ソクラテス以前断片集』第一分冊 271頁）。また彼は弟子たちに「いつか私は杖を手にして、ふたたびお前達の前に立ち、お前達を教えるだろう。」と語ったとも言われている（ヒルシュベルガー『西洋哲学史Ⅰ』理想社 57頁）。さらに彼は、自分が何度も生まれ変わり、その時々すべてのことを記憶している、とも言ったそうだ（同上『ソクラテス以

前断片集』205頁）。

ではそのピタゴラスは、このような魂の不死という思想をどこから学んでいたのか。

新プラトン主義者ポルピュリオス (ad233～304) は、ピタゴラスの教説の由来について次のように言っている。

「比較的多くの人々の言うところによれば、ピタゴラスはいわゆる数学的知識に関する事柄をエジプト人、カルデア人、フェニキア人から学んだのだという。古い時代から、エジプト人は幾何学について、フェニキア人は数や計算について、カルデア人は天体現象について研究してきたからというのがその理由である。また、神々への祭儀やその他の生活にまつわる営みについては、マゴス僧たちに師事し、これらを修得したと言われている。」（同上書 207頁）

つまりピタゴラスは、数学はエジプト人、フェニキア人、カルデア人から学んだのだが、宗教思想は「マゴス」から得たと言われている。そのマゴスとは、そもそもカスピ海の南方に住むメディア人の部族名であったが、のちにメディアやペルシャ（イラン）の司祭を意味するようになった。彼らが信奉した宗教思想は、「ゾロアスター教」と呼ばれている。

ゾロアスター教の思想を特徴づける一つの論点は、次節に述べる独特の時間論だった。ピタゴラスがマゴス僧たちから得ていたのは、この時間論だったのだ。それはゾロアスターからピタゴラスへ、そしてピタゴラスからソクラテスへと伝えられたにちがいない。ソクラテスはそれを「想起」の思想として受け止め、「産婆術」として具体的に若者たちに応用した。さらにこれによって訓練を受けたプラトンは、洞窟の比喻において師の「想起」の思想を魂の昇華^{アセンション}として描き出したのだ。

ところでそのゾロアスターの生没年代に関しては、前2000年頃から前7世紀まで諸説紛々として確定できない。（拙論 東京家政大学紀要第40集『東西文明とゾロアスター教』参照）しかし彼がブッダ (bc463～383) やキリスト (bc4～ad28) よりも早く生まれたことだけは疑いようがなく、したがってゾロアスター教は人類最古の啓示宗教だということになる。

この宗教思想は、アケメネス朝ペルシャ (bc558～331) とササン朝ペルシャ (ad226～651) において広く国教として信奉された。しかしササン朝後期になると、これを司る僧侶たちは形式主義と他宗教への凄まじい不寛容に陥って腐敗し、ついにイスラム教の隆盛に押され壊

滅していった。現在では、イランのヤズドやインドのムンバイなどにわずか数万の信徒が残るのみとなっている。

またゾロアスター教においては、主神の名がアフラ・マズダ (Ahura Mazda) であるされるところから、これはまた、別名「マズダ教」とも呼ばれる。また「最後の審判」においてすべてを焼きつくすとされる「火」を、アフラ・マズダが創り出した「正義」のシンボルとしてあがめるところから、「拜火教」とも呼ばれた。さらに6世紀には中国に入って「祆教」とも言われ、唐代には多くの寺院が建てられたが武宗 (ad 840～846) の時に禁圧された。ちなみに韓国、慶州にある8世紀末のもっとも美しい古墳とされる掛陵には、明らかにペルシャ人の顔立ちをした武人の像が建っている。

さてではゾロアスターは時間についてどのように語ったか。それは光と闇、善と悪との峻厳な対立という思想から生じてくる。

2 ゾロアスター教の二元論と時間論

ゾロアスター教の主神アフラ・マズダの「アフラ」とは、語源的には「霊」の意味であった。これをゾロアスターはその経典『アヴェスター』では、「主」という意味でとらえている。さらに「マズダ」とはそもそも「賢」を意味し、そこから智慧を意味するようになった。したがって、ゾロアスターの言うアフラ・マズダとは、「智慧ある主」、「全知の主」という意味である。

ゾロアスターの説いた宗教思想では、この主神アフラ・マズダは宇宙創造の原理であるとともに、善の原理とされる。ソクラテスが若者たちに「善とは何か」と問いかけていたとき、この問いがゾロアスター神学では神を知る道につながるのだと、彼はピタゴラスを通じて知っていたにちがいない。

善の原理であるアフラ・マズダは、ゾロアスター教では「光」によって象徴される。ソクラテスは、この象徴の仕方も弟子プラトンに教えていただろう。「洞窟の比喻」でプラトンが「善のアイデア」を「太陽」によって象徴したのは、ゾロアスターの「光」に由来していたのだ。さらにプラトンが洞窟の中で燃える「火」を設定しているのは、ゾロアスター教が「火」を正義の象徴とすることによって由来していると思う。

ゾロアスターは、善の原理 (光) としてのアフラ・マズダに対立するものとして、悪の原理 (闇) としての「アンラ・マンユ」(Angra Mainyu) を設定した。(それ

はのちに「オルマズド」とも「アーリマン」とも言われるようになる。) 光と闇、善と悪との峻厳な二元論、これがゾロアスター教の根本特徴である。

この二元論は、ゾロアスター 30 歳の時、川を渡ろうとしている最中に、アフラ・マズダによって啓示されたとされている。

そのときまずアフラ・マズダの使者で「善思」と呼ばれる大天使が、ゾロアスターの前に現れた。それは、真実を求めて修行するものに現れる靈感のようなものであったのだろう。(「善思」は彼よりも身の丈が9倍もあったという。) この大天使は、ゾロアスター教神学における最高神アフラ・マズダを手助けするものとして設定されている六柱の大天使 (①正義、②善思、③王国、④敬虔、⑤完全、⑥不滅) のうちの一柱である。「アムシャ・スプンタ」の「アムシャ」とは「不死なる者」、「スプンタ」とは「力を持つ、手助けする」を意味する。つまり大天使たちは、自体非顕現のアフラ・マズダが自己を顕現し自己を実現するのを手助けする助っ人として設定されているのだ。

(大天使は仏教流に言えば、自体非顕現の法身に対応する応身に当たると言えよう。それは地上の菩薩済度のために種々に応現するものとされる。さらにここで大天使たちの数が六柱とされていることは、旧約聖書において神が世界を創造するのに六日を要したと記されていることに深い関係がある、と私は考えている。また韓国や日本の寺の屋根瓦によく見受けられる一つの円を中心に六個の円が描かれる図は、後述する善霊と六柱の大天使というコンセプトに由来するものと思う。)

さて渡河中のゾロアスターの前に現れた「善思」は彼に問いかける。「汝は何のために努力しているのか。」「私は正義のために努力しております。」では「正義は何処に見いだすことができるのか。」と善思はゾロアスターに尋ねる。彼は、それは貴方 (善思) を通して見いだすことができるはずだと、答える。そこで善思は正義を含む五柱の大天使たちが集う場所へとゾロアスターを導いていく。善思はまさにガイドとしてゾロアスターの修行の完成、済度を「手助けする」のだ。善思はゾロアスターに正義を見せてから、ついに彼をアフラ・マズダの面前へと導きだしていく。

ゾロアスターに出会ったアフラ・マズダは、自分こそが正義を筆頭とする六柱の大天使たちを造り、正義 (「天則」とも約される。つまりは宇宙創造の理法を言う。)

を通して宇宙を創り出したものであると述べて、さらに次のように語る。

「始めに二霊ありき。二霊とは心と言葉と行為において、より善なるものと、より悪なるものであった。二霊は光と闇なりき。光を選ぶものは光ある存在に列せられ、闇を選ぶものは闇なる存在に列せられん。」

上に「始めに二霊ありき」と言う「始め」とは、宇宙開闢の「始め」と解してよいだろう。現代流に言えば、約150億年前のBig Bangの開始ということになる。そして現代科学の観点からすれば、二霊とは引力と斥力（作用と反作用）をもったエネルギーと言うことになる。E=MC²のEに当たると言えようか。

現代科学では、Big Bangが何故生じたのかは問おうとしない。しかしゾロアスター神学では宇宙開闢の原因を創造主アフラ・マズダーの意志に求めたのだ。さらにこの神学では、上述の通り、宇宙には「始まり」があるとされる。そして後に述べるが、宇宙には最後の「総審判」としての「終わり」もあるとされる。つまりアフラ・マズダは、始まりと終わりのある連続的時間の中で、宇宙を創造したのだ。そのような連続的時間は「長い自立的な時間」と呼ばれる。

ではアフラ・マズダが宇宙を造りだす以前には時間はなかったのか。我々が通常経験する連続的な長い自立的な時間ズルワーン・タルゴーン・クワザークはなかった。なぜならそれは、宇宙創造とともに始まるからだ。時間がなかったとすれば、アフラ・マズダもなかったことになる。それでは宇宙の創造もなかったことになる。しかし宇宙は厳に有る。とすれば、アフラ・マズダは長い自立的な時間ズルワーン・タルゴーン・クワザークに先だって「有る」と考えなければならない。時間のない「有る」は考えられないから、アフラ・マズダが「有る」時間とは、連続的歴史的な時間以外の時間でなければならない。つまり生ずるのでもなく滅するのでもない非連続的な時間でなければならない。

ゾロアスター神学では、そのような時間を「無限の時ズルワーン・タルゴーン・クワザーク」と呼んでいる。それは我々の住む宇宙が創造される以前にも有り、宇宙の終末の後にも限界なく有る「時」だと言われる。いわば万物の創造に先立つ不生不滅の「永遠の今」である。アフラ・マズダとは、無限の時そのものなのだ。このような考え方は、後のゾロアスター神学では、「ズルワーン主義」と呼ばれた。

アフラ・マズダの持つ時間性格は、仏教流に言えば、阿弥陀仏の持つ時間性格と同じだと言ってよい。サンスク

リット語の「アミダ」は、「無量寿」と漢訳されるように、それは「量」つまり宇宙空間の広がり、「寿」つまり時間の連続的広がりを持たないもの（「無」）である。つまり宇宙の広がり以前からすでに有り、連続的歴史的な時間を超えてそれ以前からすでに有るもの、それが阿弥陀仏である。もちろん仏教に言う阿弥陀仏は宇宙の創造者とはされないから、この点ではそれをアフラ・マズダに比するわけにはいかない。しかし少なくとも両者の持つ「不生不滅の時」という時間性格が同じである点では、アフラ・マズダを阿弥陀仏と言いかえることはできよう。

不生不滅の時であるアフラ・マズダは、ではなぜ宇宙を創造したのか。なぜ不生不滅の「時」から、連続的歴史的な「時間」を生み出したのか。私はそれを、アフラ・マズダが自分を経験したかったからだ、考える。アフラ・マズダの自己経験、それがBig Bangだったのだ。

宇宙開闢の以前、ただ不生不滅の「時」だけが有った。宇宙はまだなく、アフラ・マズダだけが有った。それはOnly Oneで有った。Only Oneとしてアフラ・マズダはただ自分だけが有りながら、自分が力強きもの、善なるもの、慈悲あふれるものであることをただ知っているだけで、経験することはできなかった。そこで彼は、知っている自分をすべて経験したいと思った。経験しようと意志した。そのとき彼はOnly Oneとしての自己をTwoへと分解せざるを得なかったのだ。

なぜなら、たとえば指はなにものかにかにさわる能力を持っているが、指だけがあつて他には何もないとすれば、指は何かに触るという能力を経験することはできないからだ。指は指にはさわれない。また目はなにかを見る能力を持っているが、目だけが有って他には何もないとすると、目は何も見ることはできないからだ。目は目自身を見られない。さらにどんなに自分が強いことを知っているても、相撲は一人では取れないからだ。自己のみがあつて他にはなににもないばあい、自己は自己を経験することができないのだ。

このことは次のように言ってもよいだろう。己が力のあることを経験するには例えば何かを引かなければならない。引く力が作用するためには、離れる力が作用しなければならぬ。ハンマーを引き回すためには、ハンマーは引き手から離れていかなければならない。ハンマーの離反力もまた、引き手自身の力から生じているのだ。このようにしてのみ引き手は、自己自身の力を経験するの

だ。つまり力あるものが自分の力を経験するためには、己の一つの力を互いに反する引力と斥力という二つの力に分解しなければならない。

こうして Only One は自分を経験すべく、互いに反する二つの方向へと自己を分解した。One は Two となって始めて、経験が可能になった。この Two が「始めに二靈ありき」と言われる「二靈」である。それらは、善靈スブンタレヒユと悪靈 (Angra Mainyu) と名付けられた。善靈は、アンラ・マンユと悪靈 (Angra Mainyu) と名付けられた。善靈は、スルワーン・アカラナ無限の時としてのアフラ・マズダが、長い自立的な時間の内へと生み出した自己自身のいわば分身である。「内在のアフラ・マズダ」と言うこともできよう。これを超越的絶対的アフラ・マズダが発する自らへの引力だとすれば、悪靈はアフラ・マズダが発する自らへの斥力、離反力であると言える。

二靈とは無限の時としてのアフラ・マズダが自己を経験するために、自己自身から長い自立的な時間の内へと生み出した自己の二つの分身であったのだ。不生不滅の永遠の今から、走馬燈のごとき生老病死の生滅の時間が生じたのだ。超越が自己を経験するためには、内在とならなければならないのだ。不生不滅と生滅とはおなじ不異だ。

このように宇宙に起こる出来事は Only One の能力の自己展開だとすると、それはすべて「永遠の今」においてすでに知られていたことになる。すべてはすでに Only One の内に書かれていたのだ。言うなれば無限の時としてのアフラ・マズダは、あたかもすべてを記してある巨大な DVD-ROM 百科事典のようだったのだ。この DVD が発動し始めたとき、宇宙は映像として始まった。

とすれば我々の行為は、すでにアフラ・マズダによって決定されていたのか、我々はアフラ・マズダの操り人形なのか、ゾロアスター神学は決定論であるのか、もう一度アフラ・マズダの言葉を聞いてみよう。

「始めに二靈ありき。二靈とは心と言葉と行為において、より善なるものと、より悪なるものであった。二靈は光と闇なりき。光を選ぶものは光ある存在に列せられ、闇を選ぶものは闇なる存在に列せられん。」

原初の二靈は、心と言葉と行為において互いに排斥し合うものである。それらは絶対に相容れない。闇は光の欠如なのではない。薄暗闇などという中間は存在しない。ここがゾロアスター教の峻厳なところだ。この峻厳に区別される光と闇の闘争が、歴史つまり長い自立的な時間

である。そしてこの闘争の場面のすべては、すでに書かれてしまっている。

なるほどすでに書かれてしまっているが、どの場面を我々が経験するかは、我々自身に任されているのである。DVD のチャンネル選択権は我々にある。そこが「光を選ぶものは光ある存在に列せられ、闇を選ぶものは闇なる存在に列せられん。」と述べられているところだ。光と闇のいずれの陣営に加わるか、それは我々の選択に任せられているのだ。今見ているチャンネル(そこに我々がいるのだが)に善の意味付けをするならば、そのチャンネルを見続けられればよい。悪の意味付けをするならばチャンネルを変えればよい。つまり別の生き方を勇氣をもって選択すればよい。今の状況の自分が厭なら厭と、「心」に思い「言葉」に出し「行為」を起こせばよい。これをゾロアスター教では、善思、善語、善行の「三徳」と言い、身につけた三重の帯クステイでそれを象徴している。(仏教に言う身口意の「三密」とは、ゾロアスター教の「三徳」に由来すると思う。)重要なことは、意味の選択が自分の生涯を決めていることを、It is up to you. だということをよくよく認識することだ。自分に起こるすべては、まず自分が心に「思う」ことから始まっているのだと、認識することだ。この認識を欠くとき人は無責任という悪に陥る。フエフ・マナフ善思がゾロアスター教においてガイドとされるのは、このことを言っている。

ところで最近 Enya というケルト系の女性歌手は「Only If」(ただ望みさえすれば)という曲の中で、If you really want to, will you find the way. Only if you want to, you can find the way. と歌っている。「本当に望むならきっとやり方は見つかるわ。ただ望みさえすればその日は来るのよ。」とでも訳そうか。肝心なのは、本当に望むことだ。思うことだ。ここからすべては始まる。本当に望みさえすれば、きっと実現すると、彼女は歌っている。All is up to you. 彼女は現代によみがえった優しい女ゾロアスターだ。

さらにゾロアスター自身が語ったとされる次の文章も、個々人の選択決定言いかえれば自由な意味付けの重要性を述べている。

「耳によって汝らは聞け。最も優れたる教えを、曇り無き心を持って見よ。二種の信条についての選択決定に関することで、おのおのの人間が自分自身のためにするところのものを、重大なる歩みの前に、我々をして悟らしめんがために。」(ヤスナ 30 章)

最も優れた教えつまり峻厳な善悪二元論を、よくよく考えるべきである。状況をどのように意味付けているか、それは我々の自由意志による選択にかかっている。ハイデッガーの固い言葉で言えば、我々は死へと投げ込まれた存在 Sein zum Todeだ。最後の総審判へと向かう存在だ。だからこそこの重大な歩みの前に、曇り無き心をもって刻々と善悪の選択をすべきなのだ。他人の目ばかりを気にした右顧左眄の人生は、心を曇らせてついに自ら決断することもなく、結局無自覚的に無責任という悪を望むことになる。総審判へと先駆ける「先駆的覚悟性」Vorlaufende Entschlossenheitをもって、生きべきなのだ。上の引用文はこのように言っている。

もちろん我々が刻々選択する善悪は、現実的相対的善悪である。したがって自分が選択した善が、他の人には悪と見えることもあろう。自らに聞いて恥じるところがなければ、それでよいのだと思う。それが光と闇の闘争の歴史なのだ。相対的善悪のいずれもが、ズルワニズムの立場では、アフラ・マズダの分身なのだ。自分がよく考え選択したのであれば、長い自立的な時間が熟したとき、すべてはついには善となるのだ。

よくよく考え選択し決断したのならば、その結果はもはや不生不滅の永遠の今に任せればよい。無量寿に南無すればよい。本当に任せることができたとき始めて、「自分を勘定に入れない」行為が、我々に可能になるだろう。そのとき我々は、歴史という長い自立的な時間に身をゆだねられるだろう。そうして我々の心に平安が訪れるであろう。

また Enya が歌っている。Let the day go on and on.

3 ソロアスター教の歴史観

無限の時においてただ自己の善を知るのみであったアフラ・マズダは、自己を経験すべく自己を相反する二極へと裂開した。そうして善霊と悪霊との闘争という長い自立的な時間が生じた。この歴史的時間は1万2000年よりなり四つの次期に分割されると、中世ペルシャ語で書かれた『ブンダヒシュン』は創造神話を語っている。

第一四半期には、アフラ・マズダによって宇宙開闢の始めに創り出された光明界と暗黒界は、虚空を隔て完全に上下に分離していた。光明界には善霊のほか正義を筆頭とする六柱の大天使たちがいた。また忠直、公正、

契約等々の諸神霊や、すべての善きものに依じて存在する個々の守護霊が、霊的状态で創造されていた。この時期には物質世界はまだ創造されておらず、すべては霊的世界にあった。暗黒界には悪霊が生み出され、光明界の構造とは正反対の構造世界が創造された。

第二四半期になって二つの物質世界が二つの霊的世界に依って創造された。ゲーティエグはメーノグの不完全な模倣なのである。

第三四半期になって、それまで画然と分けられていた光明と暗黒の二種の世界が混交し始める。悪霊がその軍勢を率いて天空を破り光明の世界に攻撃を開始したのだ。光と闇は混在し、水は塩水となった。悪霊の被造物である爬虫類が跋扈した。

さらに悪霊は原初の牛を殺した。牛の死体からは植物が生じ、またその精液は月に集められ清められて、益獣がそこから生まれた。

ガヨーマルト（ガヤ・マルタン）と呼ばれる原人も、悪霊の遣わした死魔の犠牲となった。そしてその遺体からは金属が生じ、精液は太陽に清められて地上に落ちて大黃が生じた。それはやがて、人類の始祖マシュエとマシュヤーネ（旧約聖書のアダムとイヴ）になる。彼らは最初はただ水だけを飲み、それから植物を食べようになり、さらに乳製品そしてついには肉を食べようになった。

なおマシュエとマシュヤーネを祖先として彼ら以降生み出される人間は、死を迎えてその肉体は地・水・火・風の四大に帰することになる。現代流に言えば、宇宙エネルギーに戻っていくことになる。だからゾロアスター教徒にとっては墓場は必要ない。遺体は、沈黙の塔と呼ばれる小高い山の上で鳥葬にされた。しかし人の魂は、死後単なる宇宙エネルギーに還元されてしまうわけではない。それは死後も滅びることなく、この世とあの世の中間に架かる「選別の橋」を渡って「個別の審判」を受けることになる。生前、善思、善語、善行の三徳の帯を常に身につけて正義を保持した義者の魂は、大天使や諸神霊による審判を受け、それぞれ生前の行いに準じて光り輝く「善思界」や「善語界」もしくは「善行界」に入っていく。そして義者の内ゾロアスター教がもっとも推奨する最近親婚を行っていたもののみが、アフラ・マズダの住む最高天に入ることができるとされる。そこが狹義の天国である。一方、三徳を実行せず虚偽にしたがった不義者の魂は、同様の裁きを受けて、

まさにサダイズムの世界と言えるような凄まじい地獄界に落とされることになる。因果応報の原理だ。

ところでこの第三四半期には三人の王者が登場したと、この神話は語っている。第一の王者はイマ・フシャエータ（インド神話のイマ、仏教の閻魔）と呼ばれ、彼の時代は人類の黄金期であった。次いで悪龍ダジ・ダハーカが王として混交の世界を支配した。第三にスラエータナオという名の王が悪龍を退治した。

こうして最後の第四四半期になり、その最初にゾロアスターが誕生したのだと語られている。ゾロアスターの死後、その精液は霊的に保存され聖なる処女が千年ごとにそれを受胎し、（マリアの処女懐胎のストーリーはここから生じている。）三人の息子が生まれるとされる。そして彼らはそれぞれ人類の救済者となる。最初の息子ウクシュヤト・ウルタ（「正義を栄えさせる者」の意）の誕生以降、人類は肉食を控え、それから乳を飲むことを控え始める。（ピタゴラス教団に属する人々は、完全なヴェジタリアンだった。）二番目の息子ウクシュヤト・ヌマフ（「婦命を栄えさせる者」の意）の誕生からは、植物を食べることも控え、そして三人目の息子アストワト・ウルタ（「正義の具現者」の意）が誕生してからは、人類はただ水だけを飲んで肉体を維持することができるようになる。この神話は言っている。人類の祖先マシュエとマシュヤーネがたどったいわば墮落のプロセスとは逆の、浄化のプロセスをこの第四四半期ではたどることになるのだ。この三番目の息子アストワト・ウルタは正義の具現者であり、彼の下で正義は完全に顕現する。彼こそが混交の世界の最終的救済者となるのである。（この救済者の概念が、キリスト教のメシア像の原型となったのだ。）

正義を完成させるのが、善霊と悪霊の二つの世界に属する両軍の最終決戦である。両軍激しく戦ったのち、ついに最終の正義の具現者に率いられた善霊軍が勝利する。そのとき正義を象徴する「火」が山々を溶かし、真っ赤な溶岩が川となって地上を流れると言う。またこのとき、かつて悪霊の遣わした死魔に殺害された原人がヨーマルトがまず甦り、次に最初の男女マシュエとマシュヤーネ、そしてその後57年かけてすべての死者が復活するとされる。彼らは、最終戦に生き残った者たちとともに溶岩の川を渡って、ゾロアスターの三番目の息子にして最終的救済者・正義の具現者による最後の「総審判」の場に向かうのである。三徳の帯を常に身につけ

正義を保持した義者には、この溶岩の川は暖かい乳のように感じられるという。しかし三徳を実行せず虚偽にしたがった不義者は、三日三晩この流れに焼かれ苦しまなければならない。しかし彼らもまた四日後には「火」によってすっかり浄化され、もはや罪業を持たず、したがって影を持たない者となる。ここに原初の状態への帰還が完成するのである。

ゾロアスター教は、以上のように神話という表現方法によって、善悪が激しく戦ってついに善が勝利するのだという歴史観を語っている。すなわちこの神話は、長い自立的な時間言いかえれば歴史的時間が、時熟Zeitigungする有様を表現しているのだ。そしてこの神話をプラトンは洞窟の比喩で現したのだった。

この神話で語られている第一の四半期以前の、つまりアフラ・マズダがまだ無限の時においてあった状態は、プラトンの比喩では、洞窟の外で光り輝く太陽として描き出される。太陽はこの比喩では善そのもの、つまり絶対的善アフラ・マズダを象徴しつつ、認識と存在の可能根拠とされている。

そして第一四半期に創り出される霊的世界は、その太陽の光の下にある諸処のイデアの世界、不変の真実界である。そこにはいっさいの影はない。

さらに第二の四半期に創造される物質世界は、地底深くに掘られた洞窟の内部にあって、燃える「火」に照らし出されて台座の上に置かれている現実の世界だと言える。それはイデア界の不完全な模倣物だと言ってもよい。

そして第三の四半期に出現する善悪混交の世界とは、プラトンの比喩では、先の火に照らし出されて洞窟の奥底の壁に映った影の世界である。言うなれば、模倣（現実界）をさらに模倣した仮象の世界である。洞窟の底に生まれながら手足をつながれ、ただ前方の壁しか見ることのできない囚人たちは、その影の世界つまりは感覚的にのみ経験される仮象世界を、現実の世界だと思いこんでいる。神話に言う第三四半期にあって肉を喰らっているマシュエとマシュヤーネの末裔は、プラトンの比喩ではこうして血眼の囚人として描き出されているのだ。

最後の第四四半期の光景は、囚人たちが深い洞窟の奥底から脱出し峻厳な坂を登って、ついに地上に出るまでの様子である。プラトンはゾロアスター教の歴史観を師ソクラテスから聞いて知っており、それを洞窟の比喩として自分なりに表現したのだと、私は思う。

ところでさらに、私には仏教の「三界火宅」の比喩も

またゾロアスター教が説く歴史的時間の神話表現を別の形で表現したものであるように見える。そこでは神話は三階建ての家が炎上している物語として描かれている。

神話に言う第一四半期の霊的世界は、三界火宅の物語りでは、最上階の三階部分に比することができよう。そこは、仏教では「色なし。定あり」の「無色界」と言われている。「色」とは物体とか実体のこと、「定」とは、ものの不変の本質を意味する。ゆえに「色なし定あり」とは、物体はなくただ本質のみがある世界を言う。論理学や数学といった純粹理論的な学問の世界とも言えよう。あるいはそれは詩歌や文学の世界とも言えよう。そこでは、物事の本質を述べる言葉のみがあって、物体は存在しない、影はない。ゆえにたとえば、第一四半期の世界とは、シェークスピアが描き出した作品世界だと、言ってもよい。そこには人間の善悪様々な様相が、永遠に朽ちることなく描き出されている。あるいは芭蕉が描き出した世界だと、言ってもよい。芭蕉の句「梅が香にのつと日の出る山路かな」は、永遠に香り続ける梅の本質を言い表している。芭蕉が「もの見えたる光」と言っているのは、この永遠不滅の本質を指しているのだ。

神話の第二四半期の物質世界は、炎上する家の物語りでは二階に比することができる。そこは「色あり。定あり」の「色界」と言われる。つまり物体もあるが本質もある世界である。ここでは現実の梅が見事なほひをばなっている。

神話の第三四半期に言う混交の世界は、燃え上がる家の一階部分に相当する。そこは「色あり。定なし」の「欲界」と言われる。物体のみがあって、いっさいの不変の本質は見られない世界である。一階に住まう者は、梅が咲いていようとそんなことには目もくれない。「花より団子」で、いかに多く団子を喰らうことができるかに夢中だ。ここでは優劣、美醜、善悪、賢愚等々が混交し、人々はそれを競い合うのである。ここでは「所有」ということが最も重要な概念となっており、「我が物」を所有することで、とりわけ人より優れた能力を所有することで自分の優位さを確認しようと、彼らは血眼になる。そこに中国浄土教の祖善導が言う、「貪瞋痴疑奸詐百端事同蛇蠍」(貪欲、怒り、無知、疑い、奸計、詐欺に満ち満ちていて、やることなすこと蛇やさそりと同じだ。)という人間の有様が生じてくるのだ。

時宗の開祖一遍は三界火宅の様子を次のように語っている。「男女和合の一念、是れ妄執の源なり。華を愛し

月を詠ずる、ややもすれば輪廻の業。仏を思ひ経を思ふ、ともすれば地獄の焰。」まことに煩惱の炎は欲界、色界、無色界の三界のすべてに激しく燃え盛っているのだ。

では神話に言う第四四半期はこの物語ではどこに描かれているのか。それは火宅の物語に出てくる三人の子供たち全員が、煩惱の炎に包まれた家から父の呼びかけ(方便)のおかげでともに出てゆく場面として描かれている。この家を出る過程つまり出家の過程が、ゾロアスター教の神話に言う第四四半期にはかならない。

ゾロアスター教の神話もプラトンの洞窟の比喩も三界火宅の物語も、すべての人間が原初への帰還を、つまりは自己本来の面目への帰還を成し遂げると語っている。

4 ゾロアスター誕生神話の秘密

前節で見たようにアフラ・マズダの長い自立的な時間の神話的展開過程にあって、ゾロアスターはその第四四半期の最初に生みだされたということになっている。そのゾロアスターが生まれるに当たっては、彼の誕生の物語がこれまた神話という形で述べられている。この誕生神話は、いかなる意味を持つのか。

アフラ・マズダはゾロアスターを生み出すに当たってまず、彼に光輪を与えようとしたと、神話は語っている。「光」は善蓋を意味している。それは、無限の時としての自体非顕現の超越的アフラ・マズダが、長い自立的な時間の内に自らを展開した「内在的アフラ・マズダ」にかならない。ゾロアスターに光の輪を与えることはしたがって、彼がアフラ・マズダの内在的なつまり歴史的な顕現であることを意味するのだ。

ところで古代イランでは、地上の支配者は神からその力を授かるのだとする王権神授説が信じられていたようだ。その証拠に、イランのナクシュ・イ・ルスタムに残されている岩刻画には、ササン朝(224~651)のアルダシーラー一世(224~240)がアフラ・マズダから光輪を授けられている様子が描かれている。

とするとゾロアスターもまた地上の救済者として、その力をアフラ・マズダから与えられるのだと、この神話は語っているように見える。そうだとすると、光輪を与えられるのは、何らかの支配者に限られることになる。つまり光輪の付与は、ゾロアスターの場合に限る特殊限定的な出来事ということになる。

しかしこうも考えられないか。地上に現れるすべては、長い自立的な時間の第三四半期から第四四半期につまり

歴史上に登場する。しかるに歴史に登場するものはすべて、アフラ・マズダの自己展開にはかならなかったのではないか。歴史とは、自体非顕現のアフラ・マズダが自己を幻影的に投射したものでなかったのか。無限スルマフ・アフラの時間が存在を生み出すのではなかったか。ズルワニズムの観点ではそういうことになる。

とすれば光輪フワルナフの付与はゾロアスターに限った出来事ではない。光輪フワルナフは歴史に登場するすべてのものに、等しく付与されるのだ。つまり我々のすべてに光輪フワルナフは付与されるのだ。我々はアフラ・マズダの幻影的投射体なのだ。こう考えることができる。

アフラ・マズダはゾロアスターに光輪フワルナフを付与するにあたって、ドクゾーフ家の竈にまずそれを置いたと言われている。この家の娘が後にゾロアスターの母となるのである。その娘は誕生に際して光り輝いたと神話は語っている。光輪フワルナフはまず母となる人の胎内に宿ったのだ。

次いでアフラ・マズダはゾロアスターにその守護神フワラフンを付与しようとした。それは物体世界が造られる以前に霊的世界において霊的に創造されていたものだった。ゾロアスターの守護神とは、いわば彼の独自性、彼の本質にはかならない。彼が彼であることの所以、彼らしさ、彼の本質と言ってもよい。そう考えれば守護神もまた誰にでも存在するものだ。誰でも自分が自分である所以、自分らしさはもっているからだ。一見あれこれ異なった様々なことを為していようと、そこには一貫する自分らしさが常にあるものだ。守護神とはそれを言う。

アフラ・マズダは、ゾロアスターの守護神フワラフンをアスナワント山にある白いハオマの樹に置いたと、神話は言う。ハオマの樹とは、世界各地の神話にあって男根を象徴する生命樹と解してよいだろう。ヒンズーのリングももこれに当たる。日本の神話で言えば、イザナギとイザナミが子を産むにさいして、ぐるぐると回ったとされるあの「天の御柱」も生命樹である。韓国の神話でも、天帝フヘン桓因フヘンは息子桓雄ベトウサンを霊峰白頭山の頂にある神檀樹しんたんすの下に「広益人間」として天降らせたと、言われている。アスナワント山にあるハオマ樹、白頭山の頂にある神檀樹、同じだ。

アフラ・マズダはこうしてゾロアスターに与えるべき光輪フワルナフと守護神フワラフンを用意したのちに、彼の身体の実質になるものを準備した。それは「ゴーハル」と呼ばれている。一般には子供の身体は親が与えると考えられるが、ゾロアスター教では、それもまたアフラ・マズダによ

て造られるのである。アフラ・マズダはゴーハルをまず風に乗せた。風は雲となり、雲は水滴となり雨となって地上に降った。草がその雨を吸い、牛がその草を食べた。そしてゾロアスターの母となるドクゾーフの娘が、その牛から乳を絞った。ゴーハルは今、乳となったのである。

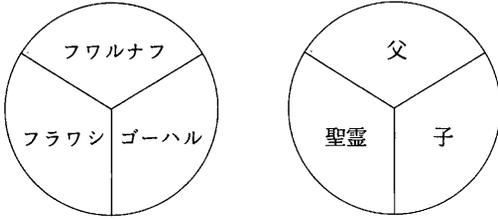
ところでアインシュタインの相対性原理は、通常 $E = MC^2$ と表記される。ということは彼の考えでは、エネルギー (E) を光速 (C) の二乗で除したもの、それが質量 (M) であるということになる。(M = E/C²) つまり重さをもった物体とは、膨大なエネルギーの結集したものである。影あるもの (物体) は、影なきもの (エネルギー) からできているのだ。アインシュタインの相対性原理は、そう言っている。

ゴーハルとは、アインシュタインの言うエネルギーだと、私は思う。ゾロアスター教が神話という表現手段によって現したゴーハルは、現代物理学という表現手段では、エネルギーにはかならないのだ。ゴーハルは今、乳となっている。エネルギーが今、乳として結集している。やがてそれはゾロアスターの身体となるのだ。

ゾロアスターの父となる男の名はボルシャースパと言われている。彼はアスナワント山に上ってハオマ樹を切り、そこから樹液をとってきた。母となるドクゾーフ家の娘は、牛の乳を搾った。そして二人はハオマの樹液フワラフン (守護神) と乳 (ゴーハル) とを混ぜ合わせ、ハオマ酒を作った。ゾロアスターの守護神フワラフンとその身体となるべきゴーハルは、こうして混ぜ合わされた。すでに娘の胎内には生まれてくる子ゾロアスターに与えられるべき光輪フワルナフが孕まれている。若い二人はいよいよハオマ酒 (守護霊 + ゴーハル) を飲み干して、同衾した。ゾロアスターの光輪フワルナフと守護神フワラフンとゴーハルの三者は、かくしてドクゾーフ家の娘の子宮の内スルマフで一体となった。こうして長い自律スルマフ的スルマフな時間の第四四半期の最初にゾロアスターは生み出されたのだった。

ゾロアスターの誕生神話は、①光輪フワルナフ、②守護神フワラフン、③ゴーハルという三つの要素が一体化してゾロアスターという個体を構成しているのだ、と告げている。私はこれが、神話表現という形態をとっているにせよ、理論化された最古の三位一体理論なのだ、と思う。

いろいろ異説もあろうが、上の①光輪フワルナフ、②守護神フワラフン、③ゴーハルは、キリスト教の理論で言えば①父、②聖霊、③子に該当すると思う。



光輪は、自体非顕現のアフラ・マズダ（超越アフラ・マズダ）が時間の内へと、つまりは歴史の内へと内在化した形である。それを私は先に「内在アフラ・マズダ」と言っておいたのだ。この内在アフラ・マズダ言いかえれば善霊が、キリスト教で言うイエスと一体化した「父」の原型だと、私は思う。イエスという歴史的存在へと顕現した「父」である。生滅の歴史へと内在化し、そこに顕現した不生不滅の神自身である。

①守護神は、身体（ゴーハル）の内に混入される以前のゾロアスターである。それは神話的表現では、創造の第一四半期に純粹に靈的な状態で造られ善霊や大天使や諸神霊とともにあったとされる。つまり神及び神々とともにあったと言われる。ソクラテスが「我々の魂はかつて神々とともにあった」と言うのは、この守護神のそもそもの有様を言っているのだ。これが、「聖霊」という觀念の原型だと、私は思う。それは身体の内に入る以前に「父」（内在アフラ・マズダ）とともにあった。「父」とともにあったがゆえに、聖霊は「神の子」とも言われるのだ。ここで「神の子」と言われるさいの「子」とは、イエスの身体を指しているのではなく、イエスの魂（守護神）を指しているのだ。

さらにアフラ・マズダはその創造過程の第二四半期に物質世界創り出したと、神話は語っていた。その際のいわば原質量となったものが、ゴーハルだったのだ。物質世界とは宇宙エネルギー（ゴーハル）の結集したものであったのである。牛の乳を通してゾロアスターの身体となったゴーハルが、一般に「父と子と聖霊」と言われるさいの「子」に該当する。それは「神の子」といわれるさいの「子」（聖霊）ではなく、イエスの「身体」（ゴーハル）を指しているのだ。つまり「人の子」でもあるイエスを指しているのだ。

私は先に、力あるものはその力を経験するために己の力を相反する二つの力に分解しなければならないと、ハンマー投げの例を挙げて語った。同様にアフラ・マズダもまた物質世界において己自身を経験するためには、己

自身を相異なる二つの力に分解しなければならなかった。この二つの反発力が守護神（聖霊）とゴーハル（人の子）だと、私は考える。

守護神（聖霊＝神の子）はひたすら善霊（父）を求め、それに従順であろうとする。つまり守護神（聖霊＝神の子）は善霊（父）への引力として働く。

しかるにゴーハル（人の子）は、しばしば善霊（父）から離れようとする。というのも、ゴーハルはゴーハル自身に触れて感覚を生み出すからである。たとえば身体となったゴーハルが乳となったゴーハルを飲めば、そこに味覚が生ずる。ゴーハル（身体）がゴーハル（乳）を味わうということになる。つまり感覚とはゴーハルの触れ合いなのだ。

さらにまた男の身体となったゴーハルは女の身体となったゴーハルに触れて、快感を生む。そして快感はそれへの執着を生み出す。執着の果てに自我意識（仏教に言う第七末那識）が生じる。「人の子」とはこの自我意識を言うのである。自我意識とはしたがって、ゴーハルが引き起こす作用を統括しつつ、それらを自己が引きおこしていることと誤認する所に成立するのである。こうして自我意識が誤まって自立化してしまうとき、それは善霊（父）からの斥力として作用するのだ。人はこうして感覚世界にのみ囚人のように縛られる。だからこそゾロアスターもブッダもそしてイエスも、人里離れた山中に何年間もこもって、「人の子＝自我意識」を制御する修行に取り組まなければならなかったのだ。ゴーハルを守護神（聖霊＝神の子）の作用としての引力によって制御しきることによって成功して始めて、自分が真に神の子（聖霊）としての力を発揮していることを自覚できたのだ。イエスは「あなた方は人の子を引き上げたとき始めて、私が何であるかを知るであろう。」（ヨハネ8-28）と、人々に語った。このとき、「人の子を引き上げる」とは、善霊（父）からの斥力であるゴーハル（人の子＝自我意識）を守護神（聖霊＝神の子）の作用としての引力によって完全に統御しきるという意味なのだ。

ゾロアスターの誕生神話は、かくして、実は三位一体を語っていた。これがこの神話の秘密である。しかもズルワニズムの立場では、ゾロアスターという個体を構成する三要素（①光輪、②守護神、③ゴーハル）はすべて、アフラ・マズダが長い自立的な時間の内へと自己を顕現したものにほかならなかった。言いかえれば不生不滅の無限の時が、自己を経験すべく生滅の長い自律立

フラワーン的な時間へと自己を顕現したもの、それがゾロアスターだったのだ。

しかもこれら三要素はゾロアスター教においては、特殊ゾロアスターにのみ限定されるのではなく、我々一人一人もまたこれらの三要素から成り立っているのだ。だから我々もまたゴーハル（人の子＝自我意識）を守護神によって統御し「人の子を引き上げる」ことができるとするならば、己の魂の本源の場所へと帰還することができるのだ。

そのためにはまず、峻厳な善悪二元論をよくよく考えるべきである。「耳によって汝らは聞け。最も優れたる教えを、曇りなき心を持って見よ。二種の信条についての選択決定に関することで、おのおのの人間が自分自身のためにするところのものを、重大なる歩みの前に、我々をして悟らしめんがために。」つまりは自らの守護神によく聞いて決断すべきである。右顧左眄ではなく、刻々の選択を為すべきである。自らの守護神に聞いてそれ以外の選択なしと判断するならば、その判断がたとえ悪であろうと、それはアフラ・マズダが自らの経験のために下す判断である。私の判断は、無限の時としてのアフラ・マズダが長い自立的な時間の内へと自己を投影した一つの映像なのだ。刻々意味付けよ。そして選択せよ。無限の時（無量寿）へと我が身を南無せよ。

Who can say where the road goes, where the day flows? Only Time.

And who can say if your love grows as your heart chose? Only Time. Enya